



「浜崎伝建物語」は大槻洋二氏（現萩博物館長）の執筆により浜風だより第1号（平成20年8月1日号）から41回にわたり掲載されました。清水満幸前萩博物館長の寄稿とともに浜崎の民俗と歴史について分かりやすく書かれており好評を戴いておりましたが、このたび読者の方から、新しく浜崎に関わる方にも読んでもらいたいという声があり、再度ご紹介させて頂くことと致しました。第1号の発刊から20年近く経過し、読み返してみると改めて浜崎の歴史の深さを感じることが出来ます。適時選抜して掲載いたしますのでお楽しみください。

## お雑様の展示が 始まりました

4月3日まで



会場は旧山村家住宅、旧山中家住宅、萩市インキュベーションセンター。他所にはない「源氏柶飾り」など、浜崎の商家で大切に受け継がれてきたお雛さまです。ほうこ人形を含め370体が飾られています。どうぞお越しください。

江戸時代の初めの頃の浜崎を描いた城下町絵図（山口県文書館所蔵）



その後の絵図で確認できるように、江戸時代を通じて少しずつ拡張し、現在に残る浜崎の町並みがつくりあげられたようです。

大槻洋二

## 浜崎伝建物語

### 浜崎の町並みの誕生

浜崎の町並みは、萩城下町がつくられた当初から存在したようです。萩に残されている数々の城下町絵図の中で萩城開府から約五十年後の慶安五年（一六五二年）頃に作成された城下町絵図をみると浜崎本町筋と推定される一本の町筋が描かれ、「船蔵」と記されている御船倉を取り囲むように「町」が描かれています。

ところが、その南側一帯（浜崎一区から熊谷町にかけて）や住吉神社の境内のあたりは「侍屋敷」と記されています。また、現在の浜崎魚市場から中村船具店の北側あたりまでは「濱崎」、浜崎新町のあたりは「濱」の文字が記されているだけで、町並みは描かれていません。このように、町人の住む浜崎は、当初は御船倉周辺のごく限られた範囲にだけしかなく、

## 「ほーこさん・ほうこ人形」と雛の節句

萩地域においては、月遅れの四月三日に、雛の節句（桃の節句・雛祭り）を祝います。全国的には、この日に人形を飾り、桃花や菱餅（ひしもち）を供えて白酒をいただくようになったのは、江戸時代初めのこととされます。一般の家庭で雛祭りが盛んに行われるようになるのは、一部の家を除き、更に時代が下って明治時代以降のこととされます。

一般の家庭で飾られる雛人形は、初めは紙製のものが多く見られました。後にこれが布製となり、単なる人形（ひとがた）の形に似せて作ったものから公家（くげ）の正装の座姿へと変わります。そして江戸時代中頃より、現在見られるように、細工の細かい内裏雛（だいりびな）や調度品などが飾られるようになるようです。

人形の姿形は、時代や地域により少しずつ異なります。また男女雛の位置も明治時代までは現在と逆で、向って右側が男雛（おびな）、左が女雛（めびな）でした。

萩地域においては、「ほーこさん」とか「ほーこ人形」と呼ばれる禿髪（かむろ）がみ、髪を短く切りそろえて垂らした子供の髪形（かみ）がしばしば飾られます。「這子」の字があてられることが多いこの「ほーこさん・ほーこ人形」は、一般的に、誕生した女兒の初節句の祝いに贈られます。かつては、同じくお祝いに贈られた産着を着せて、雛人形などとともに飾られました。

「ほーこさん・ほーこ人形」や雛人形などの人形は、生児の身代わりとなるもので、生児に災いが及ばないよう願ってこれを贈るとされます。人形（ひとがた）としての役目を持つもので、大変注目されます。

全国的に見てみると、雛の節句の日には、女兒に限らず大人たちも仕事を休み、野山や海川の辺りで終日を過ごしていたとする所が多くあります。ヒナオクリとかナガシビナといって、人形（ひとがた）などの形代（かたしろ）、人の霊を宿すものに穢（けが）れを負わせて水に流すとする所も少なくありません。

かつて人々は、一年の節目節目に、日常とは異なる特別な時間を過ごし、身についてしまった災いのもとを捨て去り、生まれ変わって元気に過ごそうとしたと考えられます。雛の節句には、女兒の誕生と成長を祝うだけではない要素もあるようです。

四月三日は、住吉神社境内の粟嶋様（粟嶋神社）の祭り日でもあります。粟嶋様は、病などの災いから女性を加護して下さる神様とされます。安産や良縁を祈願してお参りも多いと聞きます。

※浜風だより34号より復刻転載

清水満幸



旧山村家住宅に飾ってある「ほーこさん」

# 浜崎朝市 大賑わいでした！



12月1日、第7回目となる浜崎朝市を開催しました。例年通りこだわりの農水産物が並び、早朝よりたくさんのお客さまで賑わいました。今回は特にシェフの皆さんにお願いして食事を充実させて頂いたところ開催時間中、人出が途切れず、来客数は過去最高でした。観光客はもちろん、市内外のリピーターも多く、お客様にも出店者さんにも喜んでいただけた楽しいイベントでした。

来年もやります！

はじめまして！



(一社)モチベース

(浜崎一区)

和泉 宏 です

いずみ ひろし



浜崎の皆さんこんにちは！私は光市出身で、2021年4月に東京から萩に地域おこし協力隊として移住しました。協力隊任期中は萩市教育委員会に所属しながら、市内3つの高校で探究活動(自分の興味関心を探したり、追究したりする学習)の授業づくりや相談対応などをしてきました。それから2023年1月に探究教育の企画やサポートを行う「一般社団法人 motibase (モチベース)」という会社を立ち上げ、代表理事として働いています。

浜崎では2025年6月頃から古民家をお借りしており、ZEN大学というオンライン大学の学生がその家に1か月間滞在し、萩のいろんな人・もの・ことと出会いながら自身の志や原動力を探る教育プログラムの運営を行っています(今年度は9月と11月に実施し、全国各地から計9名の学生がやって来ました)。

浜崎での生活を味わって、「第二のふるさとになりました！また来ます」と言ってくれた学生もいました。私たちも来たばかりの新参者ですが、これからどうぞよろしくお願いいたします。



## あっちゃん先生のひとことアドバイス



冬は気温が低いと、末梢の血液循環が悪くなります。すると皮膚に栄養が行かず、皮膚の新陳代謝が落ちて内部からカサカサになってきます。これを冬季皮膚乾燥症といいます。乾燥肌が悪化すると、肌がかゆみや炎症を起こ

し、肌荒れの原因となります。乾いた皮膚は弾力を失うので、ちょっとしたことで傷つきやすくなります。すると菌がその傷口から進入してきて、皮膚の感染症を起こします。さらに、乾燥した皮膚は体温をキープする力も低下しているため、体が冷えやすくなり、かぜや下痢などにもかかりやすくなります。そこで、冬場の乾燥肌を防ぐための対策をご紹介します。

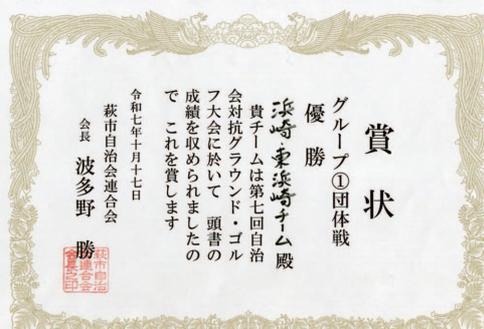
- 1. 入浴** 39～40度くらいのお湯にしましょう。温かいお湯につかっていることで皮脂が失われますので、湯船に入っている時間は長くても15分程度にしてください。身体を洗うときは、石けんなどをよく泡立て、肌を守っている角質を落としすぎないように手で優しく洗います。お風呂上りにバスタオルでゴシゴシ拭くのも厳禁です。
- 2. 保湿** 保湿剤でしっかりと保湿ケアをすることが大切です。自分に合った保湿剤を選んで、入浴後や乾燥が気になったときにこまめにお手入れをしましょう。ただし、乾燥性皮膚炎と診断され医師から外用薬を処方されている場合は、他の薬ではなく処方された薬を使ってください。
- 3. 湿度の調節** 室内が乾燥していると肌の乾燥も進みます。室内の湿度の目安は約40～60%です。加湿器などで調節して乾燥を防ぎましょう。また、逆に湿度が高くなりすぎると、今度はカビなどが発生する原因にもなります。部屋の空気の適度な入れ替えも必要です。
- 4. 刺激の少ない肌着** 化学繊維の衣類が肌に直に触れると、かゆみを誘発したり、皮膚から水分を奪ったりすることにつながります。肌着は、綿や絹など天然の素材を選ぶようにしましょう。
- 5. 爪を短く切る** かゆみはできるだけ掻かないという対処が望ましいのですが、爪は常に短く切っておきましょう。つい掻いてしまったときに傷がつきにくくなり、黄色ブドウ球菌などによる感染リスクも減ります。
- 6. 栄養バランスのよい食事** バランスのとれた食事が大事です。かゆみがあるときは、辛いものなど刺激物は避けましょう。また、ビタミン類を豊富に摂ると肌の代謝が促進され、潤いを保つことができます。
- 7. 紫外線対策** 紫外線を浴びることによって皮膚の乾燥は進みます。UVカットの化粧品、帽子や日傘を使用し、衣類などもUVカットのものを選びましょう。
- 8. 睡眠** 睡眠不足は身体にとって大きなストレスになります。ストレスは肌の代謝のバランスを悪化させますので、質のよい睡眠をとるようにしましょう。



「肌がかゆい」という何気ない症状ですが、適切なケアをしないと悪化させてしまう場合があります。まずは生活習慣を見直してみましよう。

わたぬきクリニック院長 綿貫篤志

萩市自治会連合会主催の第七回自治会対抗グラウンド・ゴルフ大会で、浜崎・東浜崎チームが優勝、浜崎新町北古萩チームが準優勝しました。ますます練習に励んでこれからの活躍を期待します。



- ◆ 近頃、視察研修に浜崎を訪れる方が増えてきました。建築関係の方や外国のまちづくりに携わる方など様々で、しつちゆる会でもできる限り対応させて頂いています。2月4日には令和3年に伝建指定された廿日市市宮島町(安芸の宮島)から15名が来訪されます。
- ◆ 私たちの30年に亘る経験が少しでもお役にたてたらと思います。

編集委員：宮田・川久保・岩崎・石村・平野・末益

